

日本女子大学校創設とアメリカ

——成瀬仁蔵と教え子たちのアメリカ留学を中心に——

島 田 法 子

はじめに

この小論は、アメリカの女子教育、そしてアメリカ文化が日本女子大学校の創立期に及ぼした影響を、「アメリカ留学」を鍵に読み解くものである。まずアメリカ留学が創立者成瀬仁蔵（1858–1919）の女子高等教育観と日本女子大学校創立にどのように影響を与えたかを考察する。次いで日本女子大学校初期の卒業生たちが成瀬の奨励を受け、成瀬の跡をたどるようにアメリカに留学し、帰国後社会的活動を展開、あるいは母校の教育を担う人材となっていたことを追う。日本女子大学校創立によって、大学の門をくぐる事が許されなかった女性たちにも高等教育を受ける道が拓かれ、さらに明治末期から大正期にかけて、卒業生にはアメリカ留学によって大学院教育も受ける機会が与えられるようになった。アメリカ留学に焦点を合わせることによって、アメリカが初期の日本の女子高等教育にどのように影響を及ぼしたかを見ることができよう。

1. 成瀬仁蔵のアメリカ留学と日本女子大学校の創立

成瀬仁蔵がアメリカ文化に触れたのは、沢山保羅がアメリカ留学から帰国してキリスト教の宣教師となり、1877（明治10）年故郷の山口県の吉敷村に戻った際に再会したときに始まったのではなかろうか。それ以降、成瀬は沢山を追って大阪に出、キリスト教徒となり、アメリカ人宣教師を知り、彼らを通じて一層アメリカを知ることになった。成瀬はキリスト教牧

師となり大和郡山で伝道に励んだが、さらに沢山に請われて新潟に牧師として赴任。新潟では新潟女学校と北越学館の創設に関わった。しかし成瀬はいわゆる北越学館事件に遭遇し、苦闘のすえに解決したのち、宣教師たちの支援を得て、1890 (明治 23) 年末にかねて念願であったアメリカ留学に発った。

成瀬の留学目的に関して、中嶋邦は (1) 信仰・宗教上 (アメリカのキリスト教社会の実際を見聞して新潟滞在中に直面した宗教上の問題を検討し自己の立場を掴むこと) と、(2) 教育上 (女子高等教育を視察して女子高等教育を通して社会改良を行うための指針を得ること) の二つであったと指摘している²。新井明は、それに加えて第三の目的として英語の習得を挙げている。成瀬の同郷の先輩で政府高官の内海忠勝が、「日本の将来を考えるときに、洋学 (それも英学) の知識が不可欠」であることを教え込んだという³。成瀬は、3 年間にわたる留学の前半 (1891 年 1 月から 1892 年 6 月) はアンドーバー神学校において神学を学び、留学の後半 (1892 年 9 月から 1893 年 12 月) はクラーク大学に移り、女子教育に研究に焦点を移して学んだ。

専門教育のほかに、成瀬はアメリカ滞在中、あらゆる方面に関心をよせ、日常のアメリカ的生活の様相から、アメリカの国内事情、世界の諸事情に至るまで幅広く貪欲に観察した。そして視察・調査した成果を日記に書き付けた。その過程で、成瀬はおのずと日米を比較し、日本社会を客観視し、日本社会の改良の方策を考察することになった⁴。アメリカ留学の経験は、帰国後の女子高等教育実現へ向けての基盤となったのである。成瀬は帰国の段階で、もはやキリスト教伝道ではなく、日本の女子高等教育を通して、社会改良に生涯献身すること考えるようになっていた。成瀬は日記に、「吾天職ハ婦人ヲ高め徳ニ進ませ力と智識練達を与ヘアイデアルホームヲ造らせ……理想的社会ヲ造るニアリ」と記した⁵。

さて、19 世紀末のアメリカは、女子高等教育が普及した時代であった。南北戦争後の 1860 年代から 1880 年代にかけて、いわゆるセブン・シス

ターズと呼ばれた女子大学7校だけでなく、上代タノが留学したウェルズ女子大学など、多くの女子大学が設立された。成瀬はまさに適時にアメリカの教育界を観察したことになり、その状況から日本の女子大学設立に関する多大なインスピレーションを得た。特にウィルズレー女子大学やスミス女子大学等の女子大学から多くを学んだことは周知の事実である。さらに、その時代には共学の大学も多くなり、博士号を取得する女性も珍しくなくなっていた。大学教育にみられたもう一つの新しい動きは、人格教育を強調するリベラル・アーツ教育、「自由高等教育」の普及であった。成瀬はこのようなアメリカの大学教育の動向を実際に体験し、それを帰国後の女子教育論に生かしている。

成瀬は、1894（明治27）年1月にアメリカから帰国し、梅花女学校の校長に就任した。翌年の夏、麻生正蔵の協力を得て『女子教育』を執筆し、1896年2月に出版にこぎつけた。これこそ成瀬がアメリカの女子高等教育を視察し、研究した成果といえるものであった。いわば、女性の人格教育、リベラル・アーツ教育の提言といえるもので、青木生子はこの著作について、「古今東西の豊富な事例を自在に駆使して女子教育の新しい『百年の大計』を体系的に論述した労作というべきである」と評している⁶。この著作は日本の教育界の注目を集めた。

『女子教育』には、日本女子大学の教育理念である、女性を「人として、婦人として、国民として」教育するという根本が示されている⁷。そして成瀬は、欧米諸国の女子高等教育の発展の歴史と現状を詳しく紹介し、先進国に並び立つためには日本でも女子に高等教育を与えて力をつける必要があることを力説している。その他、知育、徳育とならんで体育と実業教育の重要性を指摘したり、外国語（英語）教育の必要性に言及したり、理想的な家庭としての寄宿舎論を展開したり⁸、いわば女子大学創設の青写真とも言うべき総合的な女子高等教育論であった。

翌年、成瀬は神戸市帝国教育会に招かれ、「女子教育振起策の一端」と題

した演説をした。著書『女子教育』に基づき、女子高等教育の必要を説いたものである。今しばらく、成瀬のこの演説に目を留めよう。成瀬はこの教育会の参加者に持論を展開し、彼らを説得するために、欧米の事情を論拠として、理路整然と説明している。まず、アメリカにおける女子の大学生が驚くほどに増加している 1880 年代のアメリカの状況を紹介している。

……アメリカにおいては 1886 年の調査によりますと、大学女生徒、ただし男女混合大学或いは女子大学の区別なく、総数は 4 万 2663 人です。実に全合衆国男女大学生の 100 分の 30 以上に位しております。しかるにその後 7 年間に於ける女子高等教育の進歩は実に著しいものでありまして、女生徒の数もだんだん増加致し、新たにできた大学も少なくありませんから、したがって女子生徒の数も増していることは疑いはありません。今 2、3 の例をあげますれば、当時スミス女子大学の生徒の数は 400 名でありましたが、一昨々年私の参りました時には 750 名以上に達しておりまして、校舎を増築しなければ新入生を入る余地がないありさまでございました。プリンモア女子大学は当時創立の際でありまして、女学生 100 名に満ちませんでしたが、今日では 400 名以上に達しているということであります。ハーバードのごときも一昨年に至りまして、その付属女子大学〔ラドクリフ女子大学〕を今の本校に合併致しまして、女子にも男子同様の特権を授け、かつ同一の学位を与うることと致しました。¹⁰

1886 年の段階で女子の大学生が「100 分の 30 以上」を占め、その後さらに急増していたアメリカの状況は、成瀬を大いに刺激したことであろう。

さて成瀬は、そのようなアメリカの女子教育の状況を述べてから、日本に目を転じ、「しかるに本邦では二つの大学でことがすんでいる。四千万以上の人口を有するわが国にわずかに高等学校が六つしかない。……」¹¹と、その嘆かわしい状況を顧みる。成瀬が帰国した 1894 (明治 27) 年の日本の教育の実情は、小学校の就学率でさえ、男子 78%、女子 44% に過ぎず、中島邦が指摘するように、「復古的な風潮にのった女性論が横行し、女子教育の必要性に水をさすものがあつた」という状況であつた¹²。

成瀬は、続けて、「今ここに他の国の例をあげてみまするに、今日一番女

子教育の盛んなる国はアメリカであります。」と述べ、アメリカの状況をさらに詳しく紹介する。すなわち、アメリカでもほんの少し前までは、女子高等教育は女子の身体に害を与え、子供を生み育てる能力を損なうという議論が広くあったことを述べ、勇気をもって世界に目をむけ、先進国に学ぶように招く。

アメリカが始めからああいうように女子教育が盛んになったと思うのは大変な間違いである。……アメリカで女を教育しない、学校に入れなかったのは、ついこの間までのことであったのであります。アメリカにおきましても、最初は女子教育は非常に女の身体に害を与えるものである。女の身体を台なしにしてしまうだろうという説があり……ましたけれども、アメリカの人間は決して失敗を怖がり、攻撃を恐れなかったのみならず、ますます改良を加えて悪いところは改めたのでございます。今日アメリカの大学の女学生の身体は立派である。¹³

このように述べると成瀬がアメリカに傾倒したかのように聞こえるかもしれないが、それは正しくない。成瀬自身が次のように弁明している。

……私がこれまでアメリカの例を多く引きましたから、諸君の中に或いは私はアメリカの女子に心酔しているという疑いがあるかもしれませんが、決して私は心酔しておらない。私もアメリカの女子の弊害を認めている。ずいぶんその弊害を感じているけれども、これは教育そのものの罪ではない、かの国の風俗の罪である。私がアメリカの教育制度をよけい引いたというのは、アメリカでは二、三十年の実験に照らして行っている。その結果もここに顕れてきている。ゆえにその国民の声には大いに注意を傾ける価値があると考え引用した訳でございます。¹⁴

青木が指摘するように、成瀬の主張には、「新しい欧米の範例に多くを学びながら、その単なる模倣ではなく、日本独自の立場で行うべきだとする考えが一番の根底にあった」¹⁵ といえよう。

1901年に創立された日本女子大学校は、成瀬の『女子教育』の青写真に

基づいて立ち上げられた。そこには成瀬がアメリカ留学から得た構想の多くが実現をみているが、重要なものとして以下の3点を挙げたい。

第一に家政学部の設定と日本における家政学の確立を挙げることができよう。成瀬はアメリカ留学中の経験から社会の単位としての家庭の重要性を認識するようになり、「よき家を造らば善き社会を生ず可し。よき家は社会の模範トナル可し。家は社会の元素なり。理想的ホームを造るを最大之目的とす可し。殊に婦人の目的なり。」と日記に記した¹⁶。成瀬にとって、家庭改良は社会改良の出発点であった。重要なのは、成瀬のいう家政学が単なる良妻賢母としての家事の習得ではなく、理想の家庭を築くための総合科学としての家政学であったという点である。成瀬の言葉を引用するなら、「家政学は最も幸福健全にして効力ある家庭生活に貢献する諸有方法物事を科学的に研究する学問を包括する」のである¹⁷。これが日本で最初の家政学部の設定であった。成瀬のアメリカ留学当時にアメリカで成立をみた家政学を、創立当初から日本女子大学校の一番の柱に据えたのであった。

第二に英文学部の創設と英語教育の重視を挙げることができよう。成瀬は日本女子大学校における教育を、国際的な視野から捉えていた。すでに見たように、英語の習得は成瀬自身のアメリカ留学の目的の一つであり、英語は世界に開かれた知識の窓の役割を持っていることを成瀬はよく認識していた。成瀬は留学中に「女子ニ英学ヲ教ユル可否、之より真ニ専門ヲ修メ広く世界の事情、実事、学説、経験ヲサグラントスルニハ英語ヲ学ブヲ要す。」と日記に記しており¹⁸、『女子教育』の中でも英語教育の必要性を主張し、「本邦の時勢は……只独り男子のみに外国語の教育を授け、世界的智識を与へ、国民の半数以上を占むる女子に、其恩沢を蒙らしめざるの不可を勧告しつつ有るを認むるなるべし」と述べている¹⁹。男子の中学校では1876〔明治9〕年にすでに英語教育が主要科目であったのに対し、高等女学校では1901〔明治34〕年の文部省令でやっと選択科目として導入された段階であったから、日本女子大学校に当初から英文学部を設置したことは革新的であった。中嶋によると、

……世界的に通用する女性の育成がはじめから目指されていた。英語教育（構想では英語教育からまず手をつけ、以後広げる予定であった）の重要性を指摘し、創立当初から英文学部（当時の名称）をおいた。入学者が少数であっても、明治末に入学者全体が減少して一時募集を制限〔国文専攻が5年間募集停止〕した時期でも、英文専攻は継続していく。語学を通じて他国の文化や時代の動きを知り、自国を客観化すると同時に自国を自覚することに通ずるとみていた。²⁰

英文学部設置の目的は、英米文学の研究だけでなく、女子が男子と並んで、外国と交流し、外国からの知識を習得するための手段としての英語教育であった。新井は、英語教育こそは「男子中心の高等教育の弊を打ち砕くための方策」であったと見ている²¹。

そして第三に、寄宿舎教育の重視を挙げることができよう。日本女子大学設立にあたり、寄宿舎は教育のもう一つの柱となった。成瀬は留学先のアンドーバーに到着した際、旧友のH・H・レビット家に迎え入れられ、家族の一員となった。レビット家において、成瀬は家族が互に自立しつつ、相互の愛と信頼に基づいて労働を分かち合い協力する姿に感動し、またその中心であるレビット夫人の賢明な女性としてのあり方に感銘を受けた。日記には、将来、レビット家をモデルにした寄宿舎を建設することを、「之を女学校の寄宿舎に応用せば如何」と記している²²。さらにウェルズレー女子大学の寄宿舎等から、その教育的意義について大きな示唆を得た。日本女子大学校における寮教育はそれらを反映したものであった。

2. 日本女子大学校卒業生たちのアメリカ留学

成瀬はすでにアメリカ滞在中に、日本人女性の留学を検討していたようである。1891年8月25日の日記の中で、成瀬は女性の留学の七つの条件を挙げている。

第一 身体乃 Robust health を要す。〔強健な体をもつこと。〕

第二 養生方ヲ知れるもの。〔健康保持ができること。〕

第三 十分の学問を日本ニ於て為し其必要なるものニ限る。[日本において高等教育修了後とすること。]

第四 視察、専門学の目的。[研究、学問を目的とすること。]

第五 年限は短きを善となす。理由、人情、又余り米化スルハよろしからず。

第六 何事ニも視察之眼を備具したるものニ限る。[思考力、観察力、判断力のあること。]

第七 衆ニ秀でたる者ならざる可らず。[特に優秀な者に限る。]²³

実際成瀬は、そのような条件を満たす日本女子大学校卒業生たちの留学に熱心であった。成瀬が英文学部を創設して英語教育を重要視した理由の一つは、英語を武器に世界に羽ばたく人材を育成することを願っていたからではないだろうか。中畠は成瀬の留学観を、次のように指摘する。

若くしてキリスト教に接する中で、はるばる来日し伝道活動が続ける女性たちを身近に見ており、アメリカ留学によって社会的影響力を発揮する[アメリカの]エリート的女性達、そして一般的女性達の生き生きした活動にも接し、その背後にある女子教育の実態も視察し研究した。帰国後もさまざまな外国からの情報を取り入れ、欧米へも出向き、日本の女性の未来を開くことは出来ると考えていた。積極的に留学を希望する有能な教え子たちを海外に送り出すことに何らの躊躇はない。そのための様々な配慮も行っているが、中には使命を託して送り出した卒業生もある。²⁴

その第一号は1907年に渡米した原口鶴子(英文3回生)であった。翌年には、井上秀(家政1回生)と木内愛(英文4回生)がアメリカに旅立った。原口、井上、木内と、続々と留学する先輩たちを見て、やる気のある後輩たちはその後に続くことになった。1913年には上代タノ(英文7回生)、1914年には高良とみ(英文14回生)が、さらに成瀬没後にも教え子たちは続々とアメリカに渡って大学・大学院教育に挑戦した。ここでは、成瀬が校長を務めた1901年から1919年までの19年間に日本女子大学校で学んだ成瀬の教え子たちで、海外留学した14名をとりあげ、その留学の経

緯の概要をたどる。(留学年度を確定しにくい場合もあり、日本女子大学校卒業年度順にとりあげている。)

(1) 井上秀²⁵

井上秀は家政学部第一回卒業生であった。成瀬は、家政学が学問として確立しているアメリカに井上を送り出し、最先端の知識を習得させ、日本でも学問として確立させようと計った。井上は、成瀬から「日本の家政学を確立すべし」という使命を託され、1908年に渡米し、1910年に帰国した。2年間の留学期間に、井上はコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジとシカゴ大学に学んだ。

井上が留学先に上記2大学を選んだのは、日本女子大学校学監となっていた麻生正蔵の影響が大きいと考えられる。麻生は1904年から1906年にかけて欧米の女子教育の視察に出かけ、帰国後『家庭週報』にその報告を掲載しているが²⁶、その中で麻生は、家政学の歴史の概略を述べ、コロンビア大学のティーチャーズ・カレッジとシカゴ大学とがその中心となって「家政科を今日の地位に至らしめたのであります。」と述べている。井上はその2校を留学先に選び、まずコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ家政科では自然科学的な家政学をまなび、続いてシカゴ大学家政管理学科では社会科学的な家政学を学んだ。そして帰国後教授となり、「家政を自然科学・社会科学の両面から総合的に管理する論へ発展させたのである」²⁷。井上によって日本女子大学校の家政学部は確立した。(井上は、1931年に日本女子大学校の第4代校長に就任する。)

(2) 丹下ウメ²⁸

丹下ウメも家政学部の第一回生であった。1913年東北帝国大学理科大学に入学を許可された最初の3名の女子学生の一人となった。1918年に最優秀の成績で卒業し、理学士の学位を取得した。その後、同大学院に学び、応用科学の助手として勤務した。さらに栄養学を学ぶために留学の志をたて、文部・内務両省の囑託として1921年に渡米した。同年夏には、スタンフォード大学の夏期講習会に出席し、秋からは、成瀬没後に校長職につ

いた麻生の指示でコロンビア大学に入学して2年間学んだ。麻生は食品に関する科学研究をすることを丹下に委嘱した。1923年からはジョンズ・ホプキンス大学に移り、医学研究科公衆衛生学を専攻し、1927年にPh. D.の学位を取得した。さらにシンシナチ大学の生物学教室の嘱託として勤務して、1929年に帰国した。

帰国後は母校の生物科学教授となり、有能な後継者たちを育てた。同時に理化学研究所の鈴木梅太郎の下でビタミンの研究を続け、多くの論文を発表した。

(3) 小橋三四²⁹

国文学部の第一回生で、卒業とともに成瀬の要請に応じて桜楓会の機関紙『家庭週報』の編集者となり、その後もジャーナリストの道を歩んだ。1914年には読売新聞の『よみうり婦人付録』の編集主任に就任。翌年独立して『婦人週報』を発刊し女性の地位向上を広く社会に訴えた。1919年アメリカに留学し、コロンビア大学で新聞学などを学び、ヨーロッパを視察して1921年に帰国した。小橋は欧米の女性たちの社会活動が国家をも動かす力を持つことに衝撃を受けて帰国。この思いを胸にジャーナリストとしての活動を再開し、『家庭週報』を通じて母校卒業生にも、文化の担い手としてのアメリカ女性の活動を伝えた。主婦の友社に迎えられたが、翌年急逝した。

(4) 原口鶴子³⁰

原口鶴子は1906年英文学部を卒業(3回生)。翌年コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに留学し、著名な心理学者エドワード・L・ソーンダイクのもとで心理学を学んだ。卒業生の中で最初に留学した原口の門出に、成瀬は「あなたはあなた自身であるだけでなく日本女子大学の代表でもあるのだから、健全な判断力をもたねばならない」という励ましの言葉を贈った。その言葉を胸に、原口はつらい勉強にも日本女子大学の代表としての自覚を持ち、投げ出すことなく勉学に集中し、1912年に日本人女性として初めてのPh. D.の学位を取得した。原口は、成瀬宛の手紙の中で、

女子寮の自室の壁に、明治天皇、成瀬仁蔵、父親、そして大橋広の写真をかけて勉学に励んでいると書いている³¹。

その後ニューヨークで原口竹次郎と結婚し、帰国。研究活動を活発に続け、博士論文を大幅に加筆して、1914年『心理作業及び疲労の研究』を出版した。またマスコミに積極的な活動を展開し、1915年にはアメリカ留学記『楽しき思ひ出』を出版し、アメリカの新しい文化や社会を生き生きと紹介した。原口は、大きな期待を寄せられたが、29歳で結核により早世した。

(5) 大橋広³²

大橋広は1906年英文学部を卒業(3回生)後、さらに教育学部第2部博物科の第1回生となり1909年に卒業。助手を経て家政学部助教授時代の1922年から1926年にかけてシカゴ大学に留学し、植物学でPh. D.を取得した。帰国後は、学科編成変更で師範家政学部と改組された新学部で「家庭黴菌学」を開講したり、自然観察を重視した植物学を担当したりした。

大橋は5年に及ぶアメリカ留学から、西洋と東洋の違いを肌身に感じて経験し、東洋人として世界を見る視点を得た。大橋は留学報告会のスピーチで、アメリカの物質文明偏重に警鐘をならし、東洋の精神文化の意義を強調した。「東洋は精神的に何かを世界文明に貢献する使命があるように考へられます。従って私は外国に行っている間……世界の文明に東洋は何を捧げ得るか、これを日本は、どうして捧げるかを私の?として持ち帰ったのであります」と述べた³³。(大橋は戦後第5代日本女子大学学長に就任する。)

(6) 木内愛³⁴

木内愛は1907年英文学部を卒業(4回生)し、翌年オバリン大学に留学した。学部を卒業してB. A.を取得後さらに体育専修科を修了し、ハーバード大学の夏期講座体育を履修して、1912年に帰国した。体育を専攻したのは、成瀬が主張する体育教育重視に対応するものであったように思われる。留学期間中、木内は詳しく成瀬に報告を書き、成瀬も木内に激励の手紙を

送っている。成瀬は「御着眼之处、御研究之態度、草々案、大ニ安心致候……十分実力を養ひ精神を鍛われ国家之急ニ赴かれんこと切望ニ不耐候」と書き送った³⁵。帰国後すぐに秋学期から日本女子大学校で体育・ダンスを教えた。『家庭週報』には、オベリンのクリスマスを紹介する記事や、日米の女性を比較して女性の体育の問題点を指摘する記事を掲載している³⁶。

木内は1920年に日本女子大学校を辞して再渡米し、セントルイスのワシントン大学医学部で細菌学の研究をした。2年ほど後に、同地で土屋弘と結婚。夫がワシントン大学の教授となったため、アメリカに永住した。

(7) 上代タノ³⁷

上代タノは1910年に英文学部を卒業(7回生)し、母校英文予科の英語教員となった。恩師E・G・フィリップスの紹介で新渡戸稲造の知遇を得、新渡戸の支援で1913年ウェルズ女子大学に留学した。M.A.を取得して帰国し、英文学部教授に着任した。

留学中、上代は手紙で成瀬に状況を報告し、成瀬は上代に、勉学に励み一日も早く母校の教壇に立って欲しいとの願いを伝えた。留学2年が終わった時には、「折角修養を被積将来十分御働被下度切望に不耐候」と述べ³⁸、3年目の終わりには、「折角御奮闘一日も早く御帰朝母校の為御尽し被下度候」と書いた³⁹。

上代は、成瀬没後の1924年、再度ミシガン大学、続けてケンブリッジ大学のニューナム・カレッジに留学した。

注目すべきは、上代がアメリカ留学を通して日本女子大学校に国際化をもたらしたことである。颯爽とした洋装で学生たちを魅了し、『家庭週報』を通してアメリカ女性の参政権運動等を紹介し、日本で最初のアメリカ史・アメリカ文学史の講座を開講し、世界に学生の日を開くために時事英語を教え始めた。また戦後第6代日本女子大学学長に就任すると、1958年ウェルズ女子大学と日本女子大学最初の姉妹校関係を締結し、ウェルズ女子大学から招聘した講師による「日本女子大・ウェルズ講座」を開講し、本格的な国際交流の新しい時代を拓いた。

(8) 高木美代⁴⁰

高木美代は1912年家政学部を卒業(9回生)し、高等女学校に就職した。1918年渡米し、1920年にワシントン州立大学経済学科に入学するが翌年退学し、ニューヨークに移った。1922年ニューヨーク市のドレスメーキング・スクールに入学し、洋服裁縫科を卒業した。その後編物研究のためにフィラデルフィアのフライシャー毛糸製造会社に入社した。1924年に帰国し、母校で洋裁を教え、女性の生活の簡易化、身体活動の自由化の推進につとめた。1928年に再渡米し、コロンビア大学の裁縫科で学び、翌年ヨーロッパを視察して帰国。戦後は附属高等学校家庭科教諭として教鞭をとった。

(9) 浅賀ふさ(小栗将江)⁴¹

浅賀ふさは1915年英文学部を卒業(12回生)。1918年兄の常太郎とともに渡米し、1926年シモンズ女子大学の2年研修プログラムに入学して医療社会事業を学んだ。医療社会事業は、20世紀初頭に欧米で始まった新しい社会事業分野である。アメリカでは1920年代に9割の病院が医療社会事業部を正式な組織として加えるようになっていた。

浅賀は帰国するや、日本初の病院社会事業部を設置した聖ルカ病院(後の聖路加病院)にソーシャルワーカーとして着任した。その後、医療社会事業という分野のパイオニアとして活躍し、戦前は母子保護法の制定にも尽力した。戦後は厚生省児童局の福祉専門官として児童福祉法の制定に尽くし、1953年の日本医療社会事業協会設立とともに初代会長となり、日本社会福祉大学の創設にもかかわった。

(10) 高良とみ⁴²

高良とみは、1917年英文学部を卒業(14回生)し、同年12月に、早世した原口鶴子の初心を受け継ぐことを願ってコロンビア大学大学院に留学し、原口の恩師ソーンダイクの指導のもとでM.A.の学位を取得した。さらにジョンズ・ホプキンス大学でも研究を続け、1922年にコロンビア大学から心理学のPh.D.を授与されて帰国した。翌年、九州帝国大学医学部精

神科に初めての女性教員(助手)として着任した。1927年には日本女子大学学校家政学部教授となり、1942年まで心理学を教えた。戦後1947年に女性の参政権が認められると全国区から参議院議員選挙に出馬して当選し、2期12年務めた。その後、世界平和と国際貿易のために、ソ連と中国という国交のない国々との民間交流に尽力した。

(11) 野宮初枝⁴³

野宮初枝は1919年英文学部卒業(16回生)、1928年に英語講師となり、翌年米英の女子大学を視察し、カウンセリングを学んだ。戦後教師を辞任し、日本の犯した罪を思い、平和運動に献身した。婦人国際平和自由連盟日本支部、国際融和会日本支部、日本キリスト教婦人矯風会の重要なメンバーとして活躍した。

(12) 菅支那⁴⁴

井上秀の長女である菅支那は1921年英文学部を卒業(18回生)し、フレンド平和奨学金を得てアメリカに留学した。ラドクリフ女子大学を卒業後、エール大学大学院で学び1927年哲学でPh. D.を取得。翌年帰国して教授に着任し、哲学のほか、哲学者の生涯を教材にして英語教育を行った。菅も『家庭週報』でアメリカの大学や大学院の経験談等を紹介している。

(13) 野見山不二⁴⁵

野見山不二は1921年師範科家政学部を卒業(18回生)し、同時に英文学部に再入学して1925年卒業(22回生)した。同年ヴァッサー女子大学に留学して宗教学を学び、2年でB. A.を取得。さらに1年間ユニオン神学校で宗教哲学を履修してM. A.を取得し、1929年に帰国した。帰国後は母校教授に着任し、宗教学のほか、聖書文学や英語を担当した。

(14) 高田峯尾⁴⁶

高田峯尾は1923年英文学部を卒業(19回生)し、同年ウェルズ・カレッジに留学し、英文学を専攻して1927年にB. A.を取得した。さらに続けてオックスフォード大学のセント・ヒュー・カレッジで英語英文学を学び、1930年にB. A.を取得。翌年母校英文学部に着任した。二年後高田三郎と

結婚し広島に赴いた。

以上挙げた初期の日本女子大学校からの留学生 14 名は全員がアメリカに留学した。そのうち 10 名は英文学部の卒業生で、さらに興味深いことには、その 10 名のうちアメリカで英米文学を専攻した者は上代タノと高田峯尾の 2 名のみであった。残りの 8 名は、心理学、生物学、体育学、医療社会事業学、哲学、宗教学と多彩な分野に進んでいる。成瀬の教え子の多くは、英語を手段としてアメリカの大学に飛翔し、日本では閉ざされていた大学・大学院レベルの多様な専門教育を受け、資格を取得して帰国し、日本女子大学校に教員として着任、あるいは日本社会で活躍した。

日本女子大学校は専門学校の分類にあり、卒業生は学士の学位を得ることができなかった。日本では、東北帝国大学が初めて女性に門戸を開放したのが 1913 年であり、その後も女性の入学を許可する大学は急には増えなかった。まして、大学院の壁は高かった。そのような状況にあって、アメリカ留学は日本女性が高等教育を得るための重要な選択肢であった。成瀬は後継者養成のためにアメリカに卒業生を送り出したし、積極的にアメリカ留学を希望した卒業生たちを応援した。英語を武器にした日本女性の国際交流、英語を通しての世界レベルの高等教育の獲得と男女差別の克服は、成瀬が意図したように実現したということではなかっただろうか。

おわりに

日本女子大学創立者成瀬仁蔵の女子教育観と女子高等教育の実践を、アメリカ留学を鍵としてたどってきた。成瀬は当時女子高等教育が世界で最も進んでいたアメリカに留学し、その理念と実践とを研究し、さらにアメリカ社会における女性の役割や活動を視察し、日本の女子高等教育とそれを基礎とした社会改革の青写真を描いた。アメリカの女子高等教育も決して容易に社会的認知を得られたのではなく、長い差別との闘いの歴史をたどって現在に至ったことを学び、男女差別の厳しい日本の状況にあっても勇気と決断をもって進むべきであることを深く心に刻んで帰国した。しか

し成瀬はアメリカに心酔したのではない。日本の女子教育改革のために、アメリカそして世界から学ぶべきことを客観的に選択・紹介するパイオニアの役割を果たした。

また成瀬はアメリカに卒業生を送り出すことによって後継者を育成した。成瀬自身の計画でアメリカに派遣した井上のようなケースのほか、自分の熱意で留学した卒業生たちに対しても、留学生生活をやり遂げるように励まし続けた。専門教育を受けて帰国した卒業生たちは、社会的活躍をするだけでなく日本女子大学校の後輩を育成するようになった。成瀬は英語習得の重要性を良く理解しており、英文学部を設置し、卒業生たちが英語を武器として世界と交流し、英語を通じて広大多様な知識を手にする道を備えた。英文学部の卒業生のなかから多くがアメリカに留学し、多様な分野に広がって活躍したことは、成瀬の先見性を証明しているといえよう。

注

- 1 北越学館事件については、中嶋邦『成瀬仁蔵』（吉川弘文館、2002）、59–60 頁。
- 2 同上、63 頁。
- 3 新井明「成瀬仁蔵と英文学科の創設」『日本女子大学文学部英文学科百周年記念誌』（日本女子大学英文学科、2004）、8 頁。
- 4 成瀬仁蔵著作集委員会『成瀬仁蔵著作集第一巻』（日本女子大学、1974）、482–526 頁。
- 5 同上、504 頁。
- 6 青木生子『いまを生きる成瀬仁蔵——女子教育のパイオニア』（講談社、2001）、104 頁。
- 7 成瀬仁蔵著作集委員会『成瀬仁蔵著作集第一巻』、46 頁。
- 8 同上、77–88、115–118 頁。
- 9 日本女子大学女子教育研究所編『今後の女子教育——成瀬仁蔵・女子大学論選集』（日本女子大学、1984）、22 頁。
- 10 同上、10 頁。
- 11 同上、11 頁。
- 12 中嶋『成瀬仁蔵』、95 頁。
- 13 日本女子大学女子教育研究所『今後の女子教育』、17–8 頁。
- 14 同上、17–8 頁。
- 15 青木『いまを生きる成瀬仁蔵』、106 頁。
- 16 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集第一巻』、509 頁。

- 17 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集第三巻』（日本女子大学、1981）、383 頁。
- 18 同上、486 頁。
- 19 同上、78 頁。
- 20 中嶋邦「近代日本の女子高等教育の成立と海外留学」『成瀬仁蔵の播いた種——目白からアメリカへの飛翔』（日本女子大学文学部、2003）、10 頁。
- 21 新井「成瀬仁蔵と英文学科の創設」、10 頁。
- 22 仁科節編『成瀬先生伝』（桜楓会出版部、1928）、117 頁。
- 23 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集第一巻』、511 頁。
- 24 中嶋「近代日本の女子教育の成立と海外留学」、11 頁。
- 25 小林陽子「井上秀のアメリカ留学体験の意味」『成瀬仁蔵の播いた種——目白からアメリカへの飛翔』（日本女子大学文学部、2003）、25-35 頁。
- 26 同上、27 頁；麻生正蔵「英米教育視察談（1）米国に於る家政科の略史」『家庭週報』第 61 号、1906 年。
- 27 小林「井上秀のアメリカ留学体験の意味」、33 頁。
- 28 蟻川芳子「女性科学者の道を拓く——パイオニア丹下ウメ」『成瀬仁蔵の播いた種——目白からアメリカへの飛翔』（日本女子大学文学部、2003）、13-23 頁。
- 29 日本女子大学編『日本女子大学学園辞典』（日本女子大学、2001）、133 頁；「来る新文化の鍵は婦人の手にあり」『家庭週報』第 651 号、1922 年 2 月 17 日。
- 30 日本女子大学編『日本女子大学学園辞典』、257 頁；渡部実「文化映画紹介——心理学者原口鶴子の青春」『キネマ旬報』、no. 1488、2007 年 8 月上旬号、96-97 頁。
- 31 新井つるから成瀬仁蔵宛の手紙、1907 年 12 月 21 日付、日本女子大学成瀬記念館蔵。
- 32 松沼真由子「大橋広とアメリカ留学」『成瀬仁蔵の播いた種——目白からアメリカへの飛翔』（日本女子大学文学部、2003）、37-46 頁。
- 33 大橋広「持ち帰ったわたしの？」『家庭週報』第 907 号、1927 年 10 月 14 日。
- 34 牛島道子（木内愛の妹貞子の長女）による木内愛年譜、日本女子大学成瀬記念館蔵。
- 35 「成瀬仁蔵書簡」『成瀬記念館』第 5 号、1989 年。
- 36 「日本女子大学校記事」『家庭週報』第 197 号、1912 年 9 月 20 日；木内愛子「婦人の体育問題」『家庭週報』第 239 号、1913 年 9 月 19 日；木内愛子「オペリン大学のクリスマス」『家庭週報』第 251 号、1913 年 12 月 19 日。
- 37 島田法子「日本の女子教育向上のために——上代タノの留学の場合」『成瀬仁蔵の播いた種——目白からアメリカへの飛翔』（日本女子大学文学部、2003）、47-57 頁。
- 38 成瀬仁蔵から上代タノ宛の手紙、1915 年 5 月 23 日付、成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集第三巻』、1055 頁。
- 39 成瀬仁蔵から上代タノ宛の手紙、1916 年 4 月 7 日付、同上、1059 頁。
- 40 高木美代の略歴については成瀬記念館資料による；「学生時代の真夏の生活」

『家庭週報』第716号、1923年7月6日；「なつかしき母校へ」『家庭週報』第1018号、1930年2月21日。

41 小塩和人「浅賀ふさ（小栗将江）と世紀転換期のアメリカ合衆国における医療社会事業教育」『成瀬仁蔵の播いた種——目白からアメリカへの飛翔』（日本女子大学文学部、2003）、71-81頁。

42 杉森長子「高良とみとアメリカ留学」『成瀬仁蔵の播いた種——目白からアメリカへの飛翔』（日本女子大学文学部、2003）、59-69頁。

43 日本女子大学編『日本女子大学学園辞典』、251頁。

44 日本女子大学編『日本女子大学学園辞典』、112頁；井上支那「ウッズホールより友へ」『家庭週報』第678号、1922年9月15日；菅支那子「一週間の読書千頁」『家庭週報』第907号、1927年10月14日；菅支那子「成瀬先生の晩年と当時の最年少学生」『家庭週報』第1418号、1939年1月27日。

45 日本女子大学英文学科70年史編集委員会『日本女子大学英文学科七十年史』、185頁；「在米中の野見山さんから」『家庭週報』第899号、1927年8月1日；「ヴァッサー大学卒業の日の野見山氏」『家庭週報』第962号、1928年12月7日

46 日本女子大学英文学科70年史編集委員会『日本女子大学英文学科七十年史』、184-5頁。